日本女歌伝

馬場あき子

角川書店

日本女歌伝

馬場あき子

角川書店

日本女歌伝
馬場あき子

昭和五十三年十月三十日　初版発行

発行者　角川春樹
発行所　角川書店
東京都千代田区富士見二―十三
〈電〉〇三（二六五）七一一一大代表
〈振〉東京三―一九五二〇八〈郵〉一〇二

新興印刷・宮田製本

Printed in Japan　落丁・乱丁本はお取替えいたします
0095-883077-0946(0)

日本女歌伝　目次

沼河比売と須勢理毘売——九
伊須気余理比売——一六
弟橘媛——二〇
美夜受比売——二三
影媛——二六
磐媛皇后——三〇
八田若郎女と女鳥王——三五
衣通郎姫——四二
額田王と鏡王女——四六
倭大后——五二
持統天皇——五七
但馬皇女——六二
大伯皇女——六六
大伴坂上郎女——六九
笠女郎——七三
大伴田村家大嬢——七六

沫雪の若やる胸を
畝火山木の葉さやぎぬ
火中に立ちて問ひし君はも
君待ちがたに
泣きそほちゆくも
いづへの方にわが恋ひやまむ
八田の一本菅は
わが夫子が来べき夕なり
野守はみずや
青旗の木幡の上をかよふとは
春過ぎて夏来たるらし
いまだ渡らぬ朝川渡る
あかとき露にわが立ちぬれし
うつくしき言つくしてよ
消ぬがにもとな思ほゆるかも
浅茅が原のつぼすみれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ほとほと死にき君かと思ひて
その愛しきを外に立てめやも
防人に行くは誰が背
花の色は移りにけりな
花の鏡となる水は
わが黒髪も白川の
現とも夢とも分かで
あやしきほどのたそかれに
帰るあしたは消ぬべきものを
歎きつつ独り寝る夜
暮れ待つ草に置く露の
苦しやこころ
ひかり出づる葵のかげ
傾くまでの月
遙かに照らせ
夜をこめて鳥の空音はかるとも

狭野弟上郎子——七九
東の国の恋——八二
防人の妻たち——八八
小野小町——九一
伊勢——九七
遊女しろめと檜垣——一〇二
中務——一〇六
斎宮女御——一一〇
本院侍従——一一五
右大将道綱の母——一一九
小大君——一二四
馬内侍——一二八
大斎院選子内親王——一三二
赤染衛門——一三六
和泉式部——一四〇
清少納言——一四六

めぐりあひてみしやそれとも
八重桜けふ九重に
恋に朽ちなむ名こそ惜しけれ
花のときはをはじめてしがな
遙かなるもろこしまでもゆくものは
東風のかへしは身にしみき
高師の浜のあだ波は
まだふみもみず
花もひとつにかすみつつ
手枕にかひなくたたむ
あはれ打ちそふ浪の音かな
伏柴のこるばかりなる
乱れてけさは
花の色に光さしそふ
待つ宵にふけゆく鐘の
仮りの宿に心とむなと

紫式部——一五一
伊勢大輔——一五六
相模——一六〇
出羽弁——一六四
大弐三位——一六八
伯母——一七三
祐子内親王家紀伊と小弁——一七六
小式部内侍——一八〇
菅原孝標女——一八五
周防内侍——一八九
皇后宮肥後——一九三
待賢門院加賀——一九七
待賢門院堀川——二〇〇
上西門院兵衛——二〇三
小侍従——二〇七
遊女妙——二一〇

ぬれにぞぬれし
いづれか秋にあはではつべき
人こそ知らねかわくまもなし
異浦にすむ月はみるとも
玉の緒よ絶えなば絶えね
忍ばしき昔の名こそ
下もえに思ひ消えなむ
野辺のみどりの若草に
いかなりしよの形見とか
数ならぬ憂き身を知れば
花も紅葉もひとさかり
待ちも弱らず

あとがき
殿富門院大輔——三三
祇王と静——三六
二条院讃岐——三〇
宜秋門院丹後——三四
式子内親王——三八
建礼門院右京大夫——三四
俊成卿女——三八
宮内卿——三三
阿仏尼——三七
後深草院二条——三一
従二位為子——三五
永福門院——三九

裝丁　伊藤鑛治

日本女歌伝

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

沼河比売と須勢理毘売

沫雪の若やる胸を

日本の詩歌の歴史はいつごろからはじまるのであろう。『古事記』と『日本書紀』を併せて「記紀」とよんでいるが、この記紀に歌謡が登場するのは大国主の物語からである。

大国主は出雲地方を中心に、幾つもの名前をもってよばれた大土豪であったらしく、権勢も強かったが女性関係もかなり多かったとみえる。妃には、命がけで兄たちと争ったあげくやっと手に入れた因幡の八上比売をはじめ越後の沼河比売、正妃である根の国の須勢理毘売などがある。歌謡はそれらの妃たちとの間に交わされ、実力闘争の苛酷な古代の覇者たちの横顔に、きわめてやさしい人間的なあたたかさを添えている。

越後美人の沼河比売のもとに、はるばるたどりついた大国主が、到着のその夜結婚を申し込むという〈待ちきれぬ恋の歌〉も美しいが、沼河比売の綿々たる承諾の歌も美しい。

八千矛の　神の命は
八島国　妻枕きかねて
遠々し　高志の国に
賢し女を　有りと聞かして
麗し女を　有りと聞こして
さ婚ひに　在り立たし
婚ひに　在り通はせ
太刀が緒も　いまだ解かずて
襲をも　いまだ解かねば
嬢子の　寝すや板戸を
押そぶらひ　我が立たせれば
引こづらひ　我が立たせれば
青山に　鵺は鳴きぬ
さ野つ鳥　雉は響む
庭つ鳥　鶏は鳴く
うれたくも　鳴くなる鳥か

この鳥も　打ち止めこせね
いしたふや　海人駈使
事の　語り言も　こをば

これはその時の大国主の求婚の歌である。八千矛の神とは大国主の別名であるが、その名を冒頭に誇らかに名乗りつつ、「治める国には理想の妻がなくて、はるばると来て『賢し女』のあなたをと希い、『麗し女』のあなたをと思う」とうたう構想はかなり堂々として風格も高い。

その上、「太刀の緒も解かず、衣服もそのまま」に駆けつけて、高志の嬢の寝所の前で、執拗にうたいついでいるのである。そうするうちに、しだいに夜明けは近づき、鶏の哀調ある声音、雉子の鋭い声音、そして、家々からは鶏が鳴きはじめる。そして「うれたくも鳴くなる鳥か」ということばにこもる焦立たしい実感と、いかにも耳をふさいで「やめてくれ」と叫んでいるような「打ち止めこせね」という激しい情感が素直にひびくおもしろさがある。

「海人駈使」というのは、海人部の使人で、この歌謡の伝承者であることを示している定形のことばである。

さてこのようにうたいかけられた高志の美人沼河比売は、まだ見ぬ西方の者の妻どいに心おどらせながら、しかし、軽率にその扉を開こうとはしなかった。まず同じようにうたをもって、その求

婚を受け入れるむねを答えておいてから、どのようにして訪問をしてほしいかを優しく求めたのである。

青山に　日が隠らば
ぬばたまの　夜は出でなむ
朝日の　笑み栄え来て
栲綱の　白き腕
沫雪の　若やる胸を
素手抱き　手抱き抜がり
真玉手　玉手さし枕き
股長に　寝は寝さむを
あやに　な恋ひ聞こし
八千矛の　神の命
事の　語り言も　こをば

一晩中、乙女の閨の外に立ってつまどう強引な情熱にほだされながら、世間から軽率な女だと思

われることをおそれ、沼河比売は一日一夜の猶予をとなだめているのである。この歌は、〈その待ち堪えた夜が来たら〉という歌で、かなり官能的な大胆な表現をもっている。おそらく歌垣(うたがき)というような、男女の交際が開放された場での大胆な歌が原型になっているのであろう。

陰気な屋根の下の暗い性のイメージはなく、闇にもしるく大胆な生の躍動が感動的である。二人は次の夜、まさにそのようにして結婚し、大らかでのびやかな古代の官能に身をまかせた。しかしながら、この「沫雪の若やる胸」と、夜目にも白い「腕」を誇った乙女のうたことばは、次の場面では大国主の正妃須勢理毘売によって、そっくりそのまま、夫の愛の復元を求めてうたわれねばならなかった。

正妃須勢理は根の国の王者須佐能男(すさのお)の愛嬢であった。大国主の人物を見込んで、父と故郷を捨て、苦難をともにしつつ大国主の地位をきずいた賢夫人である。ところが夫の地位が安定すると、こんどはその女性関係に気苦労が絶えなかったらしく、甚だ嫉妬深かったと書きのこされている。しかしこの場合、嫉妬が品性の低さによるそねみではなく、正妃の地位に対する誇りであるとすれば、嫉妬の深さは女の地位の高さに比例する当然の情である。

ある日大国主は、その嫉妬にほとほと疲れて、目もさめるような茜染(あかね)めの衣服に身をつつむと、急に大和へ行くといって馬に乗った。そして「――泣かじとは　汝(な)れはいふとも　山処(やまと)の　一本すすき　うなかぶし　汝が泣かさまく　朝雨の　霧に立たむぞ――」などという、美しくも傲慢(ごうまん)な別

れの歌をうたい、さすがに妃は驚きあきれて、酒壺を取り上げると盃をささげて走っていった。

妃は大国主を宥めつつ、「汝こそは　男にいませば　うち廻る　島の埼々　かき廻る　磯の埼落ちず　若草の　妻持たせらめ」となげきをうたい、つづけて次のように大国主の心を誘っている。

吾はもよ　女にしあれば
汝を置きて　男は無し
汝を置きて　夫はなし
文垣の　ふはやが下に
蚕衾　柔やが下に
栲衾　さやぐが下に
沫雪の　若やる胸を
栲綱の　白き腕
素手抱き　手抱き抜がり
真玉手　玉手さし枕き
股長に　寝をし寝せ
豊御酒　献らせ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com